

宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料「二見家文書」の

西南戦争関連文書について

宮崎市生目の杜遊古館

学芸員 鈴木 美慧

【要 約】

宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料の「二見家文書」について、西南戦争に関連する文書を中心に翻刻を行った。二見家文書における西南戦争関連文書は、昨年度に翻刻を行った分と合計すると約53通であり、戦況の報知に関する文書が多いが、書き手によりその内容は様々である。当時薩摩軍側であった人々が戦況をどのように捉え、またどのように情報を共有していたのか、西南戦争の実際に迫る史料群の一つとして重要な意味を持つと考えられる。今回紹介しきれなかった文書の詳細については本年度の『宮崎市歴史資料館研究紀要』においてまとめるとともに、来年度以降の企画展等の活用に繋げていきたい。

はじめに

昨年度（令和6年度）の宮崎文化振興協会研究事業において、「宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館寄託史料「二見家文書」の翻刻について」と題し、二見家文書の翻刻¹を行った。その際翻刻できたのは二見家文書A～Dのうち、二見家文書A（全150通）に属する56通であった。このうち少なくとも24通²は西南戦争に関連するものであり、昨年度の『宮崎市歴史資料館研究紀要』（以下『研究紀要』と略称）ではこの西南戦争関連文書を中心に考察を行い、翻刻文を掲載した。

本年度も引き続き二見家文書の翻刻を行ったが、今回は特に「西南戦争」に関連する文書を中心に作業を行った。本来であれば二見家文書Aの全体を翻刻することが望ましいが、本年度でそれを達成することは難しい。その為、まずは「西南戦争」というテーマのもと翻刻を行い、内容を概観することによって、二見家文書の企画展等への活用に繋げることを目的とする。

第1章 今回翻刻分の概要

二見家文書は、近世を通じて去川関所の御定番役を勤めてきた高岡郷士二見家（宮崎市高岡町去川

¹ 翻刻とは、古文書の文字（「くずし字」という）を現代の文字に書き起こすことをいう。

² 昨年度の研究報告書では21通と記載していたが、研究紀要執筆時に改めて内容を精査したところ、新たに3通の西南戦争関連文書を確認できたため、24通と数えた。

地区) に伝存する文書群である。昨年度記載のため詳細は省くが、文書群は4箱分の本箱に分かれ、それぞれA～Dと記号が振り分けられている。昨年度から翻刻しているのは二見家文書A(全150通)であり、明治10(1877)年前後の文書が大半を占める。今回翻刻分のうち西南戦争に関連すると考えられる文書は少なくとも29通であり、昨年度と合計すると53通にのぼる。二見家文書A全体の、少なくとも3分の1以上が西南戦争関連文書であることが分かる。

今回翻刻分を含めた西南戦争関連文書は、表1のとおりである。なお、「掲載」という項目に●印がついたものは、宮崎市天ヶ城歴史民俗資料館(以下「天ヶ城」と略称)の研究紀要第4号『宮崎市高岡町古文書史料集(三)』(以下『史料集(三)』と略称)にも翻刻文が掲載されていることを示す。3～4月の文書が最も多いが、数は少ないながら戦争の後処理に関わる文書等も存在している。

差出人として特に注目したいのは、二見昌懿・谷口彦五郎の2人である。昌懿は二見昌賢(二見家

表 1 西南戦争関連文書抜き出し

史料群	番号	史料名	和暦	月 日	差出(作成)	宛 名	備 考	掲載
A	3	勅書写(鹿児島縣下逆徒熊本縣二乱入二付)	明治10	3月12日	鹿児島県令 大山綱良		3・4包紙一括	
A	4	写(勅使儀官柳原光ヲ以詔命二付)	明治10	3月 日	鹿児島県在留従三位——、従二位——	太政大臣 三條實美殿	同上	
A	5	〔書簡(去ル廿二日肥後国川尻町着二付)〕	明治10	3月6日				
A	7	〔書簡(本田五郎殿外三士帰郷二付)〕	明治10	2月18日	谷口彦五郎	二見昌賢様	7・8包紙一括	●
A	8	〔書簡(昨旧五日ノ夕源兵衛所へ差越居候二付)〕	明治10	2月19日	谷口彦五郎	二見昌賢様	同上	
A	10	〔書簡(先日百引三掛リ大勝利三付)〕	明治10	7月14日	二見昌懿	二見昌賢様	包紙あり	●
A	14	〔書簡(明日ヨリ和泉口ヨリ出発二付)〕	明治10	2月14日	二見昌懿	二見昌賢様	14~18包紙一括	●
A	29	報知之概略(四日夜夜明方戦争相始リ二付)	明治10	5月12日			29~38包紙一括	
A	30	〔願書(鹿児島近在坂元村江在陣候二付)〕	明治10	5月24日	二見昌賢	二小区事務取扱所御中	同上	
A	33	〔覚(手負人書付 他)〕	—	7月12日			同上	
A	34	記(ミニヘール鑄型二付)	—	7月6日	高城石山村出張行進隊大小荷駄	二見昌賢殿	同上	
A	37	〔覚(隊号替二付)〕	—	—			同上	
A	40	〔書簡(本日之報知二付)〕	明治10	7月14日	紙屋出張 益山貞蔵	二見昌賢様	表裏に文書	●
A	41	記(野尻迄報知二付)	明治10	7月17日	高城滞在病院掛	高岡去川出張正副郡吏御中	包紙あり	
A	42	写(官軍鹿児島城山江攻撃二付)〕	明治10	9月25日	鹿児島県令 岩村通俊 他	所在副戸長 他		
A	44	平民出発しらべ	明治10	4月4日	二見昌賢	高岡事務扱所御中		●
A	45	〔通知(今般政府へ尋問之筋有之二付)〕	明治10	2月 日				
A	46	〔通知(岩見福右衛門他七名志願二付)〕	明治10	4月3日	二小区事務扱所	二見昌賢殿		●
A	47	記(刀剣之事)	明治10	2~4月				●
A	48	〔覚(肥後国ニ於テ當分戦闘二付)〕	明治10	4月5日				
A	49	〔覚(出発人名書出し)〕	明治10	—				●
A	50	写(福岡三番隊都城出立二付)	—	15日				
A	52	〔覚(佐土原振武書)〕	—	—				
A	53	〔書簡(内蜜通知)〕	明治10	2月24日	塚田淳			
A	67	〔書簡(私儀曩日放免二付)〕	明治10	11月11日	野村生一	谷口吉邦様 他1名	67~86綴じ紐一括、前欠	
A	79	〔書簡(兵乱二付宿當調)〕	明治10	12月7日	神崎良貞	二見昌賢様	同上、79・80包紙一括	
A	80	〔書簡(本年兵乱二付宿當調伺書)〕	明治10	12月7日	二見昌賢	神崎良貞様 他1名	同上	
A	87	〔書簡(只今病院ニ而療治二付)〕	—	1月25日	遠田口(艾力)	(二見)昌賢雅兄	87~114綴じ紐一括、87・88包紙一括	
A	88	述懐之旨	—	—	口(艾力)	—	同上	
A	89	写(筑前等兵隊肥後南関江繰出)	明治10	4月 日	山縣区長力	島津小平太殿 他1名	同上	
A	90	〔達(明十日出発之用意)〕	明治10	2月9日	二小区事務扱所	二見昌賢殿 他3名	同上、包紙あり	
A	91	〔書簡(本日出兵二付)〕	明治10	2月10日	人馬継所出張副戸長	去川諸締掛 二見昌賢殿	同上、包紙あり	
A	92	記(出兵二付爰許神社江御立願)	明治10	2月26日	大浦景福母	二見武一郎様 他1名	同上、包紙あり	
A	93	無事(熊本城・八代戦況)	明治10	4月3日	(谷口)彦五郎	(二見)昌賢様	同上	
A	94	写(所々方へー左右迄二而)	明治10	3月26日	もり元章	谷口彦五郎様 他4名	同上、94・95包紙一括	
A	95	平静(昨廿七日御状拜見仕候)	明治10	3月28日	(谷口)彦五郎	(二見)昌賢大兄	同上	
A	96	無事(帰り候もの共之咄承候)	明治10	3月23日	(谷口)彦五郎	(二見)昌賢様	同上、96~98包紙一括	●
A	97	〔戦死・手負人数写〕	明治10	3月23日	(谷口彦五郎力)	—	同上	●
A	98	〔記(三月廿六日届キ候御状の内)〕	明治10	3月26日力	—	—	同上	
A	100	〔書簡(去ル十六日夜肥後植木出発二而)〕	明治10	3月20日	(谷口)彦五郎	(二見)昌賢様	同上	●
A	101	〔裏書御仁免(鹿児島前之濱江船八艘相見得)〕	明治10	3月12日	(田中)実	(二見)昌賢様	同上、紙背文書あり、朱書	
A	103	無事(肥後地の左右聞書)	明治10	3月26日	(谷口)彦五郎	(二見)昌賢様	同上	●
A	104	〔包紙(A-103包紙力)〕	明治10	3月25日	谷口彦五郎	二見昌賢様	同上	
A	105	〔書簡(今般堀兵右衛門出兵被仰付候)〕	明治10	4月26日	鈴木重行	二見昌賢殿	同上、105~107包紙一括	
A	106	〔達(竊力ニ逃し帰り候者有之二付)〕	明治10	4月26日	二小区事務扱所	旧駅所詰正副戸長	同上	
A	107	〔添状(別紙之通御布告封シ込)〕	明治10	4月28日	鈴木重行	二見昌賢殿	同上	
A	108	〔書簡(養生仕二而候外最早快方二付)〕	明治10	4月12日	柚木崎正因	毛利元茂様	同上、包紙あり	●
A	109	〔書簡(戦争ハ大難戦六度)〕	明治10	3月27日	(二見)昌懿	御兄上様・御母上様・其外様	同上、109~111包紙一括	●
A	110	〔書簡(御養生奉希上候)〕	明治10	3月27日	(二見)昌懿	御兄上様	同上	
A	111	〔書簡(元叔父様等近況)〕	明治10	—	(二見昌懿力)	—	同上	
A	112	敵軍死傷探偵書(写)	明治10	4月4日	(鳥巢本營)	(飢肥 高岡 各隊長 各給養)	同上	●
A	113	〔書簡(別紙三条実美公宛之御書付)〕	明治10	4月14日	田中	二見昌賢様	同上	
A	114	ウツシ(父瀬戸山綱平ハ已ニ戦死仕候)	明治10	4月7日	(瀬戸山)綱高	御祖母様・其外様	同上	

12代³当主)の弟とみられ、薩摩軍側で従軍しており、戦地から昌賢に対し書簡を送っている。戦地について書き記しつつも、自分や親類、同郷の人々の近況を知らせることに紙幅を費やしており、他の報知に関する書簡と比べると私的な意味合いが強い。

谷口彦五郎の書状は高岡の中村馬場から出されていることがほとんどであり、昌賢とどのような関係であるかは定かではない。ただし、二見家文書 A-95 (以下「A-数字」と記載) などでは谷口が宛名を「昌賢大兄」と記していることなどから、昌賢の方が目上であり、かつ、ある程度親しい関係であったことが推察される。谷口は昌賢と同じく従軍しておらず、書状の殆どは谷口自身が見聞きしたり、中村馬場を通過する伝令等が持つ書状を写したりして集めた各戦場の状況を伝えるものである。

他に、各地からの報知やその写し、二小区事務扱所からの達書など、様々な種類の文書が確認された。西南戦争関連文書の全体については、次章で考察する。

第2章 翻刻文と内容の考察

本章では、今回翻刻分のうち2通について、翻刻文を記載し、その内容を考察する。まずは二見昌懿の書簡 (A-109) の一部を記載する。なお、原文は縦書きであり、旧字体・異体字・略字等は極力常用漢字に改めた。また、読解の便宜を図るため、適宜読点を挿入し、「ㇿ」を「より」と記載するなど、読みやすいように編集した箇所がある。

(前略) 此節之戦争最早委ク御聞取ニ相成候半奉存候、然ニ私戦争ハ只今迄十日、其内大難戦六度、雖然運ハ強シ、乍去向坂ト申処ノ戦ニ而、我刀スケ。ソレヲ授ラントスルニ、右之手ノベンサシユビヲアテ、半分計リ切レ、旧本月六日ヨリ川尻之病院江入ル、同十二日熊本之病院江差越候様、醫師殿より承候ニ付、右病院江罷越候処、スベテカロキキスハ甲佐ト申処江差越候様承候ニ付、当分甲佐江罷居申候、当所之手負人百名内外ニ而御座候 (後略)

(二見家文書A-109)

この文書の日付は3月27日⁴であり、薩摩軍と政府軍の最初の交戦から約1か月が経過した時期に書かれたものである。昌懿が経験した戦争は「只今迄十日」としており、10日間のうち「大難戦」が6度あったという。しかしそんな中でも「運ハ強シ」というのだから、政府軍から大きな傷を受けたことは無かったと思われる。しかし、「向坂」での戦いにおいて、昌懿自身の刀が「スケ」、それを握もうとしたところ、右手の「ベンサシユビ」(紅差指。薬指のこと)を当ててしまい、半分ばかり切れてしまった。そのため、まずは6日⁵川尻の病院に行ったものの、12日に医師からの指示で熊本の病院

³ 『史料集 (三)』、2 頁。

⁴ 書簡の末尾に記載された日付は「三月廿七日」であり、その包紙(文書を包む紙)には「十年第四月三日、旧二月二十日夕景ニ相届キ至安心候」、つまり新暦の4月3日に届いたと書かれている。その為、「三月廿七日」は新暦の3月27日を指すと判断した。

⁵ 川尻の病院へ行った日は「旧本月六日」と書かれているが、「旧本月」が旧暦の3月の事だとすると、新暦では4月19日となる。しかし書簡の日付は新暦3月27日であるため、計算が合わない。旧暦2月の事だとすると、新暦では3月20日であり計算は合うが、熊本の病院に行った日である「同十二日」は新暦3月26日となり、27日に書いた書簡としては日付の書き方に不自然さが残る。また向坂周辺で行われた主な戦いとして有名なのは2月22日、3月4～20日頃(『薩南血涙史』、『敗者

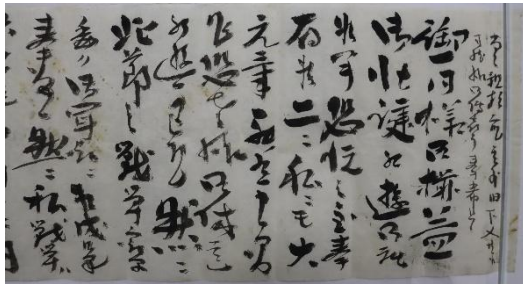


図 1 二見家文書 A-109 (一部)

に行くよう指示されて出向いた。すると、全ての軽傷者は甲佐へ行くよう指示を受けたため、当分は甲佐に居る、ということである。薬指が半分ばかり切れた、という傷がどの程度のものであったか、これ以上のことが書かれていないため詳しくは分からないが、この書簡は昌懿が書いた他の書簡と比べて字が太く荒々しい印象を受ける。仮に怪我をした右手で書いたとすれば、このように字が乱れた理由も自ずと察せられる。またこの文書からは、傷の程度で受け入れる病院が分かれているなど、薩摩軍側の医療事情を垣間見ることができる。

次に、谷口彦五郎の書簡 (A-96) の一部を記載する。

昨廿二日原口万左衛門殿便より之御状致拝見候、御返書差上る含にて、昨夕方認居候処、先達而飯野より被引返候田中某殿より、当町人共江飛脚頼入相成、兩人熊本迄差越候処、去ル十七日熊本植木ノ間着、十八日より彼地出立いたし、昨夕帰着之段承及候付、昨夜ハ八弥太所へ差越、米新殿江も取合帰り候もの共之咄承候處、硬トいたし候事一向不相分候へ共、八代辺へ舟七艘か参り上陸いたし候由、是が実正たればすかん塩梅ト申事御座候 (中略) 杯との咄シニ付、つきとめたる儀ハ相分り不申候ハ、手負之人数病院より書状被遣候へも有之、其内ニ別紙之通参り候由ニ付、写取差上申候 (後略)

(二見家文書A-96)

この文書は3月23日に書かれたものである。昨日 (22日) に原口万左衛門が運んできた (昌賢からの) 手紙を拝見し、夕方に返事を書いていたところ、先日飯野より引き返してきた田中某という人物から、町人たちへ飛脚の依頼が入ったという。田中は17日に「熊本植木ノ間」に到着し、18日に出立、昨日 (22日) の夕方に到着した。昨夜は「八弥太」の所へ差し越し、「米新殿」へも口添えし、(熊本方面から) 帰ってきた者たちの話を聞いた。すると、はっきりしたことは分からないものの、八代辺りへ (政府軍の) 舟が七艘ほど来て上陸したとのことで、もしこれが本当であれば「すかん」(嫌な) 塩梅である、などという話であった。また、負傷者の人数について病院より書状が遣わされており、谷口はその内容を別紙に写し取り、昌賢に送っている。

この書簡からは、昌賢と谷口がこの時期頻繁に手紙を交わしていたことが推察される。また、書簡に書かれた内容の大半は、明確な情報ではなく、どちらかという噂話に近いものである。しかし、刻一刻と状況が変わる戦況下、現地を見た人々の話は、たとえ噂話だとしても、谷口や昌賢をはじめとする在郷の人々にとって重要な情報であったと思われる。

第3章 西南戦争関連文書の概観

の日本史 18 西南戦争と西郷隆盛』など) である。そのため「旧本月六日」は新暦3月6日を指すと考えれば最も自然であるように思われるが、実際の所何日を指しているのか、現時点で明言は難しい。

二見家文書Aにおいて、現在のところ西南戦争関連文書と考えられる文書は53通であり、これらは第1章の表1にまとめた。大半は西南戦争中のものであるが、わずかながら開戦前・終了後のものも存在する。西南戦争開戦前の文書はA-90、A-91などであり、「二小区事務扱所」や「人馬継所出張副戸長」などから二見昌賢をはじめとする「諸締掛」に、出兵の仕度を滞りなく済ませるよう達書が出ている。西南戦争後の文書はA-79、A-80などであり、差出・宛名こそ個人名ではあるものの、内容は戦争中に軍がどこで宿営をしたかの調査であり、「何隊何掛、何月何日迄御宿営、何月何日御出立ニ相成、宿料受取・受取不申云云、来ル十日限小区所へ差出候」(A-80)などの記述から見ても、行政的な性質が強い。

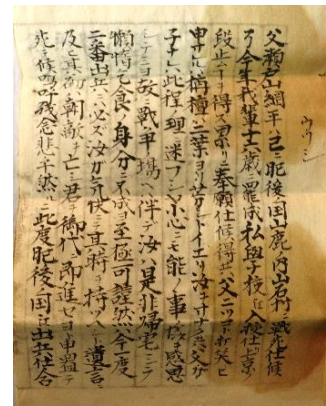


図 2 二見家文書
A-114 (一部)

西南戦争中の文書は一番多く、全体的に戦場の状況を報知するものが多い。ただ、その詳細は、昨年度紹介したA-53のように報知のみに特化した文書もあれば、本稿第2章で紹介したように私的な色合いの強いもの、また従軍していない者同士の情報共有など、書き手の立場により様々である。また、報知に関連する文書の他にも、病院からの脱走者に関する達書(A-106)や、様々な公的文書の写し、戦死した父に代わり出兵を志願した少年が書いた書簡の写し(A-114)など、様々な内容の文書が存在する。また負傷者の名簿など、当時西南戦争に参戦した人々の名前が多く確認出来る文書もある。

おわりに

以上、二見家文書の西南戦争関連文書について報告した。本年度の翻刻により、二見家文書Aの3分の1以上は西南戦争関連文書であることが分かった。二見昌賢・昌懿、谷口彦五郎などは、西南戦争の中心人物である西郷隆盛らとはほとんど関連の無い人々であるが、当時薩摩軍側であった人々が戦況をどのように捉え、またどのように情報を共有していたのか、西南戦争の実際に迫る史料群の一つとして重要な意味を持つように思われる。また、谷口彦五郎の名は、天ヶ城が所蔵する他の文書にも数多く登場する。加えて、今回翻刻分のA-111に登場した「元叔父様」という人物は、佐土原藩より西南戦争に参戦した島津啓次郎と行動を共にしていた、鮫島元である可能性が高い。このように、今回翻刻した書簡に登場した人々や地名について、より深く調査し、考察することによって、高岡郷や佐土原藩から西南戦争に参戦した人々の実際についてもより明らかになると考えられる。

本稿では紙幅の都合もあり、西南戦争関連文書の概要を紹介するに留めたが、第2章で紹介した書簡以外の翻刻文やそれらに関するより詳しい考察等は、本年度の研究紀要においてまとめたい。そして、来年度以降の企画展等の活用につなげていきたい。

引用文献・参考文献・参考資料リスト

- 1) 宮崎市教育委員会・天ヶ城歴史民俗資料館、『研究紀要第4号 宮崎市高岡町古文書史料集(三) 去川関所御定番 二見家文書』, 宮崎市教育委員会・天ヶ城歴史民俗資料館, 2007
- 2) 落合弘樹, 『敗者の日本史18 西南戦争と西郷隆盛』, 吉川弘文館, 2013
- 3) 加治木常樹, 『薩南血涙史』, 大和学芸図書株式会社, 1976